

現代中国の都市部における女性の婚姻意識と

新ライフスタイル——『中国婦女報』を手がかりに

虞 萍

はじめに

近年、中国都市部に住む一部の青年の間で、婚姻についてこのように概括している。「結婚は一種の誤りで、離婚は一種の目覚め、再婚は頑迷に非を認めないことで、独身は徹底的な悟りである（結婚是一种错误，离婚是一种醒悟，再婚是执迷不悟，单身是大彻大悟）」。

これは一つの戯れ言葉に過ぎないが、しかし多かれ少なかれ今日の中国社会の婚姻事情、あるいは一部の中国人の婚姻に対する考えを表している。現代中国人、特に中国の都市部における女性の婚姻に対する価値観および生活態度をいっそう理解し、明らかにするため、筆者は中国で初めての、そして唯一全国で発売されている女性新聞『中国婦女報』を通して、それらのことを探求してみたい。

『中国婦女報』は共産党の機関紙であり、鄧小平は自らこの新聞の題字を書いている。したがって、当然のことながら、本紙は共産党の考えだけが反映している。とはいえ、前述した如く、全国を網羅し、全国的に影響力を有しており、重要資料であることは間違いない。本紙は1984年8月8日に一日だけ発行を試みた。正式に創刊したのはこの年の10月3日であり、創刊初期は週刊新聞であった。1985年からは週2回、1988年からは週3回、1993年には週4回発行し、1995年以降、週6回発行するようになった。「社会に女性を宣伝し、女性に社会を宣伝する」ことがその出版の目的である（1995.8.29。以下日付のみ表記しているものはすべて『中国婦女報』の記事から引用。関連する記事の題名は文末に挙げる）。

本紙は1988年の発行部数は31万部で、2003年には10万部まで減った。そのため、2003年に、中国の婦人連合会の副主席である洪天慧は「全国婦人連合会宣伝工作座談会」でこのように指示している。「各クラスの婦人連合会は、公費で新聞と雑誌を契約するとき、まず『中国婦女報』を購読しなければならない。それに加えて、党・政府等の機関の婦人委員会、労働組合の女性従業員の委員会とその他の団体の会員を、『中国婦女報』を購読するよう積極的に動員しなければならない。また、『中国婦女報』の私費購読のルートを開いて、多くの女性と家庭に対する宣伝と案内をしっかりと展開しなければならない

(2003. 10. 24)」。

小論は『中国婦女報』を手がかりに¹⁾、近年中国の都市部に生活する一部の女性の婚姻意識にどのような変化が起き、女性の婚姻意識にはどのような特徴があり、彼女たちのライフスタイルは以前とはどのように変わったのか、などの問題に重点を置いて分析する。さらには、女性の婚姻意識の変化、および新たなライフスタイルといったものが家庭と社会にどのような影響をもたらしたのかについて論ずる。

I 現代中国の都市部における女性の婚姻意識

1) 「80 後²⁾」の選択

2005 年 3 月 9 日の『中国婦女報』の記事によると、重慶市のある大学の政治社会発展学院と学生課は、2004 年に、該校の 900 名の女学生にアンケートを実施し、彼女たちの恋愛と結婚に対する価値観の現状について詳細な抽出調査を行った。回収した 657 件の有効アンケートによると、うち「38.46%の女学生は、在学している間に恋愛をするのが大学生の心理的な面においても、生理的な面においても欠かせないことである」と考える。30.05%の女学生は恋愛を自分の一種の人生経験だとする。15.79%の女学生はどちらでも良いという態度で、恋愛はすべて縁に従うと考える。11.49%の女学生は、恋愛は大学に在学しているときに、空虚感を埋める一種の方法であると考えている。わずか4.21%の女学生のみが、学校にいるときに恋愛をするのは配偶者を見つける最も良い機会であると確信している(2005.3.9)」。このように、95%以上の被調査女学生は恋愛をするときに結婚を目的としていない。女学生の結婚に対する積極性が見られない。

ほぼ同じ時期に、広州市の暨南大学に在学していた姚春生ら 6 名の学生によって行われた「中国の 1980 年代初頭に生まれた大学生の出産願望」というテーマの調査もこの事態を物語っている。彼らは北京市、上海市と広東省などを含む全国 9 つの市と省で、2,000 名余りの大学生に調査を行った。この成果は、「中国の 1980 年代初頭に生まれた大学生の出産願望に関する調査レポート(「我国八十年代初出生大学生生育意愿調査報告」)」として発表された。調査レポートには「(19) 80 (年) 後」の婚姻意識の特徴について、このように指摘している。「恋愛は早い、結婚は急がない、また子供を生み育てることも急がない(恋愛不遅、結婚不早、生育不急)³⁾」。このように、若い女性だけが結婚に消極的になっているので

¹⁾ 小論で扱う『中国婦女報』は、1984 年 8 月 8 日から 2007 年 8 月 31 日までに限る。

²⁾ 「80 後」とは、中国の「一人っ子」政策(1979 年)が実施された後に生まれた人々のことである。

³⁾ 中国大学生網

http://www.cycnet.com/cms/2004/daxuesheng/news/gjzx/200512/t20051214_42727.htm

2008 年 2 月 10 日最終参照。

はなく、1980年代の初頭に生まれた男性たちも積極的に結婚しようとは思わず、子供を生き育てることはさらに二の次と考える。

とは言うものの、近年一部の「80後」世代の人々に見られる「電撃結婚」、「大卒結婚」、「電撃離婚」および「電撃同棲」現象は注目に値する。

世間は電撃的に結婚する人々を「電撃結婚族」と名づけた。結婚する前の付き合いの期間が比較的短いため、お互いに多くの面で相手を理解していない。そのため、「電撃結婚族」の離婚率は高い。

1985年に、『中国婦女報』は北京市の997名の市民を対象に、「恋愛期間が婚姻状況にもたらす影響」に関する調査を行った。表で示したように、恋愛期間が極端に短いと、調和のとれない夫婦になりがちである。また、恋愛期間が3年以下の夫婦は、恋愛期間が長くなればなるほど、結婚後の満足度が高くなっている。表で見る限り、恋愛期間が3年以上になると、結婚後の満足度が減っている。この現象は夫婦生活の中で現れる「倦怠期」と関係があるのではないだろうか。それに、半年未満の恋愛期間を経て結婚した夫婦は、結婚生活にうんざりしている比率が高い。

恋愛期間が婚姻状況にもたらす影響

感想 (%) 恋愛期間	円満	まあまあ よい	まずまず	うんざり	計
3ヶ月以内	31.1	15.6	31.1	22.2	100.0
3-6ヶ月	36.7	36.7	16.3	10.3	100.0
7-12ヶ月	53.0	33.7	12.0	1.3	100.0
1-2年	55.2	34.9	7.3	2.6	100.0
2-3年	62.9	30.8	5.0	1.3	100.0
3年以上	50.3	34.3	8.8	6.6	100.0

出所：沙茵「美満家庭知多少——北京市千人調査之一」『中国婦女報』1985年11月20日。

中国の都市部における「電撃結婚族」の問題が世間を賑わしている中、大学を卒業した後すぐに結婚する「80後」世代の「大卒結婚族」も多く現れた。『中国婦女報』の記者の調べによると、「ここ二、三年の間に、上海市徐匯区の民政婚姻科に結婚届けを出しに行った人の中で、22-24歳の大卒学歴者は年々増えて、2005年には809組の申請を受理した。2006年に、この数字は1221組まで上がった。また、盧湾区にある民政局婚姻科の李志雄科長の話によると、2006年は彼らが受理した24歳以下の大卒学歴を持つ新婚者が最も多い年であり、2005年の153組から倍増し、年間387組が結婚届けを出した。2007年1-3月に、同科は81組の『大卒結婚族』の結婚届けを受理し、例年同時期で最高の数字に達した(2007.3.30)」。

人生経験があまり豊富ではなくて、恋愛期間が短く、お互いに深く理解ができていない状態で結婚した多くの「80後」世代は、結婚して間もないうちに相手に離婚を求め、「電撃

離婚族」になる。上海市民証処の最新統計データによると、「2006年に、30歳以下の男女の離婚数は5,786組に上り、全体数の15.71%を占め、例年より上昇している(2007.6.27)」。

同時に、「80後」世代の「電撃同棲族」も雨後のタケノコのように急速に増加している。ある「電撃同棲族」にとっては、「いい加減に結婚届けを出し、すぐにまた離婚届けを出す状況より、一緒に住み、いわゆる『試し婚』をした方がまし。双方が一緒に住むのもよし別れるのもよし、面倒な法的責任を負う必要もない」。多くの「80後」世代の「電撃同棲」行為は両親に内緒にしているが、両親に黙認された状況で、一緒に生活し始めた若者もいる⁴⁾。

時代の発展につれ、人々の婚姻観念において、大きな変化が起きた。両親が子供の配偶者選びに対する関与が減り、婚姻する当事者の独立意識が強まった。婚姻に関する自己選択がますます自由になった。儒教思想が根強い一昔前の中国では、貞操観念が根付いていたため、同棲するという行為は人々にしばしば受け入れてもらえない。しかし、今日、多くの中国人はこうした考えをしなくなった。中原網によると、「北京師範大学心理学院」、「計世諮問機関(計世資訊)」および「百合婚姻恋愛研究院(百合婚恋研究院)」は2006年8月から、街頭調査、インタビューおよびインターネット調査という方法を通じて、200万人に対して調査を行った。その後、「2007年中国社会の結婚および恋愛に関する調査レポート(『2007中国社会婚恋調査報告』)」と題して、調査結果を公表した。調査された200万人のうち、「理解することができるが、自分はしない」を選んだ人は46%を占め、「理解することができるし、機会があったら自分もする」を選んだ人は51%を占め、「理解することができない、自分もしない」を選んだ人は4%に過ぎなかった⁵⁾。このように、約97%の人が結婚前に同棲することを概ね受け入れた。この数字の信憑性には疑問の余地があるが、しかし多くの中国人が婚姻の多様性を認めていることが伺える。

多くの中国人は同棲に対して、以前より寛大な態度を持つようになっただけでなく、近年、都市の住宅の賃貸と売買が大幅に増えたため、人々は「愛の巣」を容易に入手することができるようになった。これも「80後」世代で「電撃結婚族」、「大卒結婚族」、「電撃

⁴⁾ 筆者は2007年8月22日－9月4日に、中国上海市で「80後」世代である「電撃同棲族」(5名、うち男性2名、女性3名)、「電撃離婚族」(5名、うち男性1名、女性4名)、「電撃同棲族」(6名、うち男性3名、女性3名)にそれぞれの婚姻観についてインタビューを行った。また、2名の「電撃同棲族」の両親(4名とも会社員で、40代である)に話を聞くことができた。それに、30代の独身女性(5名、全員会社員で、給料は5001－7000元の間である。全員自分名義の家屋を持っている)に婚姻観、ライフスタイルなどについて聞くことができた。小論で提示している意見は、これらの調査内容に基づく。

⁵⁾ 合計は101%となっているため、データは少し誤差がある。

「北師大版『2007年中国社会婚恋調査報告』出炉」『鄭州晚報』

中原網 http://www.zynews.com/2007-09/04/content_464777.htm 2008年2月10日最終参照。

離婚族」と「電撃同棲族」が増えた一つの間接的な理由である。

一部の「80後」世代の両親の青春時代は「文化大革命」時期で、彼らの多くが「上山下郷運動⁶⁾」の経験者であり、いわゆる「二回目の独身危機⁷⁾」の中の被害者であった。彼らの恋愛は強制的に抑圧され、苦難に満ちた時代背景の中で展開された。その上、自分の愛する者を求める十分な環境と条件がないため、多くの人は自分の結婚相手を適当に選び、結婚をいいかげんに済ませたとと言っても過言ではない。そのため、この年代の一部の中国人は、恋愛と結婚に対しては幻想に満ちている。彼らは自分の望み、夢および十分に体験することができなかった熱愛の過程を、自分の唯一の子供に託した。両親から見れば、いくら短期間とは言え、自分の信用する子供が選んだ相手であるため、子供が願うのであれば、自分たちが口を出す必要がない。また、一部の親は、自分の子供を「電撃離婚族」の列に入れるより、彼らの望む「電撃同棲」を承諾した方がましと考えた。少なくとも、二人がそれぞれ自分の道を歩もうと決意しているのだから、戸籍に「汚点」が残らないではないか、と親たちは自分自身を慰める。両親たちは唯一の子供で、自分たちの青春の欠如を補うことができる何かを探し出そうとしているのである。そこで、「80後」世代は両親のこうした「心の弱点」を利用し、さらに思い切りがよく、さらに身勝手になり、自分たちが望むライフスタイルを享受することを可能にした。そのため、一部の「80後」世代の両親の青春時代の「欠落」は「80後」世代の今のような婚姻観念を促進させた一つの間接的な原因であると言えよう。言うまでもなく、同棲者は婚姻法では保護されないため、条件を満たしたときに、入籍する人もいる⁸⁾。

人々が中国初代の一人っ子の婚姻について深思熟慮しているとき、1970年代初期およびそれ以前に生まれたいわゆる結婚適齢期を過ぎている独身女性問題もメディアに多く取り

⁶⁾ 「上山下郷運動」とは、1968年以降、毛沢東の指導によって行われた青少年の地方での徴農（農作物への従事を義務付けたこと）を進める運動のこと。「上山下郷運動」は都市部の青年に地方の農村で肉体労働を行わせ、思想改造を促すことにより、社会主義国家建設に協力させることを目的とした。

⁷⁾ 「一回目の独身危機」と「二回目の独身危機」は、それぞれ1950年代初期と1970年代末の「文化大革命」が終わった後に始まった。1950年5月、中国初の『婚姻法』が公布され、全国で大勢の人が離婚した。多くの人はこの法律によって、「父母の命、媒妁の言」（儒教思想によって、男女交際の自由が強く阻害されることを指す）という旧式の婚姻を解消した。全体から言うと、一回目の独身危機の対象は男性が多い。文革中の「上山下郷運動」は一部のインテリ青年を独身のままにさせた。当時、多くのインテリ男性は農村で地元の女性と恋愛し結婚した。しかし、都市部の女性は農村部の男性をあまり受け入れなかった。そのため、結婚適齢の未婚女性が増え、一種の社会問題にまで発展した。同時に、新聞には「恋人募集欄」などができ、結婚紹介所も現れた。その後、「上山下郷運動」から都市部に戻った多くの未婚のインテリ女性が結婚し、1985年に、「二回目の独身危機」はようやくほぼ解決された。

⁸⁾ 注4で明記した筆者の調査内容に基づく。

上げられ、さらに今の時期を「三回目の独身危機期」と呼ぶ人もいる。しかし、大都市にいる多くの独身者は、「今は『三回目の独身危機期』ではない。今の独身女性の活躍ぶりはむしろ一種の社会的な進歩であり、人々がついに多くの束縛から抜け出すことができ、生活スタイルを自由に選べるようになったのだ⁹⁾」、と主張する。

それでは、「三回目の独身危機」は存在しているのか。もし存在しているならば、原因はどこにあるのか。彼女たちの生活様式にはどんな特徴があるのか。また、社会はどのようにして、これらのいわゆる結婚適齢期を過ぎた独身女性に適切な配慮を与えるべきであろうか。

2) 氾濫する「余女¹⁰⁾」

最近、北京市内では、「北大荒¹¹⁾」という言葉が流行している。「北」とは、北京市に生活している人のこと。「大」とは、結婚適齢期を過ぎた女性のこと。「荒」とは、未婚で、身の回りには特定の異性の友達がいない人のことを指す。「北大荒」は知識人、会社のホワイトカラーおよび「海外からの帰国族」に多い。彼女たちには良好な教養と手厚い給料があるが、「独身」である。1990年において、北京市の30-50歳の独身者数はおよそ10万人であったが、2005年には、50数万まで達して、そのうち女性は6割を超えた。

2004年、上海市に居住する人口のうち、初婚の晩婚率¹²⁾は73.59%まで達し、2003年の70.40%と比べると、少し上昇し、30歳で初婚の女性は決して珍しくはない¹³⁾。独身という生き方を認める上海市の女性は82.79%を占め、高学歴の女性の中では、この比率は89.94%まで達している(2003.1.18, 2007.1.26)。

言うまでもなく、これらのデータは少し疑う余地がある。ビジネスの便宜のため、一部の会社は求人広告の中で、「未婚者のみ」と明記している。そこで、一部の女性は既婚である事実を隠した。女性は「独身」と偽って仕事を順調にこなした例もある(2005.7.27)。そのため、一部の女性は「三隠主義」(すなわち、年齢、婚姻と出産状況を隠す)を実施している。

目下、中国の都市部では、「高学歴、高品位、高収入」という「三高女性」は、「優秀な女性は嫁に行きにくい」という状況に直面している。一部の男性の自尊心が邪魔し、彼ら

⁹⁾ 同上。

¹⁰⁾ 最近中国のメディアは1970年代初めに生まれた独身女性を「余女」(余った女性)と名づけた。

¹¹⁾ 「北大荒」は元々は黒龍江省の嫩江流域の呼び名で、そこが以前は広大な荒地だったのでこのように呼ばれた。解放後大規模に開拓され、現在では「北大倉」(北の大穀倉地帯)と呼ばれることもある。

¹²⁾ 目下、中国で言う「晩婚」とは、男、女は婚姻法に規定された最低の結婚年齢(男22歳、女20歳)より3年以後に結婚することである。

¹³⁾ 許沁「上海：晩婚率再上昇 專家提醒女性別錯過最佳生育期」2005年4月11日。

中国人口網 http://www.gjsw.gov.cn/rkxx/gdkx/t20050411_21258.htm 2008年2月10日最終参照。

は自分より能力がある女性を受け入れようとしめない。彼らにとっては、自分より優秀な女性といくと、目に見えないプレッシャーを感じるのである。女子大学院生は非情にも「第三の性」と呼ばれるようになった。北京市婦人連合会婚姻家庭コンサルティングサービスセンター（北京市妇联婚姻家庭咨询服务中心）は、「一部の修士と博士の女性は登録のときに、最終学歴を『大卒』としか書かない（2005. 8. 16）」と漏らしている。

1980年代に、中国の一部の会社がいわゆる結婚適齢期を過ぎた独身女性にある程度考慮し、優先的に住まいを与えた（1985. 1. 9, 1985. 3. 20, 1985. 7. 17）。また、当時自ら仲人になろうとする熱心な人も大勢いた。しかし、近年、他人の婚姻意識を尊重し、人は自分の意思で生活スタイルを選択し、享受する権利がある、ということをよりいっそう提唱されているため、人々は他人の生活については婚姻事情に関与しようとあまり思わなくなった。そのため、自ら仲人になろうと思う人も減った。それに伴い、結婚紹介所は日々成長する業界となり、人と人との関係は非常に商業主義化した。

北京市の結婚紹介所によると、「近年、登録されている中で、男女の比率は3:7である。それから、日々登録する女性の中で、24, 25歳の女性は総計の半数以上を占めている（2006. 9. 2）」。男性たちは比較的若い女性を自分の配偶者にしたいため、一部の結婚紹介所は38歳以上の女性の登録を受け入れないことにした（2005. 8. 16）。

現在では、「余女」あるいはもっと年上の独身女性は社会からの応援をほとんど得られない。そこで、彼女たちは「逃避」という手段を選び、次から次へと国土を離れていった。『中国婦女報』の記事によると、「約半数を占める18歳以下の留学生を除いて、いま中国の出国者の中で、3つの年齢の人がピークになっている。それぞれ19歳、26歳、そして30歳である。19歳と26歳の出国者はほとんど『大学入試以外の選択』と『事業発展のボトルネックを打ち破る』という出国目的を持つ人々である。一方、30歳の留学生では、女性が多数を占めている。彼女たちの多くは国内の生活で挫折を経験し、離婚したり、恋人にふられたり、あるいは長年独身の人々である。30歳すぎの女子留学生は学歴を目的にせず、ほとんどの女性は出国して、新しい生活方向を探すのである（2003. 9. 24）」。

もし、中国の一回目と二回目の独身危機はほぼ外部の客観的な要素でもたらされ、共に同じ価値観を持っているという状況の中で発生したと言うならば、今日の中国の都市部に見られる独身者が増える現象はほぼ人々の本意に基づき、社会変遷における人々の思想変化を反映していると言えよう。

迅速な経済発展につれ、社会転換期にいる中国人は日常生活においてはますます独立し、人々のライフスタイルは無意識のうちに伝統と革新の中で行ったり来たりする。これは社会転換期に、人々が懸命に答えを探し出そうとする一種の表現であると見て取れよう。

次に、中国都市における女性の今日の具体的なライフスタイルを見てみる。

Ⅱ 現代中国都市における女性の新しいライフスタイル

1) 活気が溢れる「独身女性経済」

①高まりつつある住宅の購入

過去の20年余りのうちに、中国人にとっての「三種の神器」は数回変わった。1980年代初めの「自転車、ミシン、腕時計」から1990年代の「カラーテレビ、冷蔵庫、洗濯機」、さらには今日の「自家用車、家屋、家屋の内装」に至った。現在の独身女性はこの「三種の神器」の主要な消費者になっている。「中国の女性消費者は4.8億人おり、そのうち21%は独身女性である(2003.1.18)」と言われている。

教育は女性たちにさらなる仕事の機会をもたらし、彼女たちにいっそう安定的な高収入をもたらした。特に都市部にいる多くの女性は結婚と出産を遅らせ、自分たちが求める経済の独立と自由な生活を実現しようとしている。女性たちは軽率に「結婚したい」と願わず、「自分の家屋が欲しい」ことを重視し、住宅を買うのを結婚前の一つのプロセスと考える。そのため、中国都市部にいる独身女性を買う家屋はこじんまりしていて、賃貸するのに適している(2004.4.16)、という現状がある¹⁴⁾。

家屋は中国における都市部の女性が最も関心を持ち、最も興味を示し、最も投資したい消費対象である、と言っても過言ではない。2000年に、中国社会調査事務所(SSIC)は北京市、天津市、上海市、ハルビン市と広州市という5大都市で、女性を対象に、消費に関するアンケートを実施し、このような調査結果を得た。「中国の生活消費スタイルはすでに衣食型から発展型および享受型消費スタイルに変わった。都市部の女性がインターネットショッピングに夢中になり、余暇消費が絶えず増えて、衣装、化粧品などに投入するお金が増え、食卓の消費水準も大幅に向上し、ますます多くの女性に家屋を買いたい、あるいは賃貸したいという願望が出ている。被調査者の49%の独身女性は、条件が揃うなら自分が所有する空間が欲しい(2000.5.8)」と言う。

1929年に、英国作家ヴァージニア・ウルフ(Virginia Woolf, 1882-1941)は“*A Room of One's Own*”(『自分だけの部屋』)というエッセイを出版した。ウルフは「女の人は自分の部屋を必要とする」とフェミニズム的な結論に導いた。目下、この言葉は中国の独身女性に經典として尊ばれるようになった。独身女性の心理面で、家屋はひいては自尊心、独立性と安全性に等しい価値を有す。現実的な面においては、家屋は投資の意図と経済的な収益に等しい。都市部の独身女性にとって、家屋を買うことは、自身の心理的な需要を満たす当面の急務になっていると言えよう。

とは言うものの、虚勢を張るようなホワイトカラーの女性もいる。経済的な実力を持つ

¹⁴⁾ 注4で明記した筆者の上海で行った調査によると、独身女性が購入する家屋の面積は大体40平米前後である。

ているとは言え、一部の女性は極端なバブル消費によって、「借金女」になった。次に、このような中国の都市部に現れたいわゆる「新貧族」に焦点を当てる。

②明日を享受する「新貧族」

一部のホワイトカラーの女性は、家屋を購入するためにすべての貯金を消費し尽くした。ローンの頭金を払い終わった後も、毎月余剰の銀行ローンを払い続け、心の休息ができない状況となった。他方、一部の女性は「自分は女の子なので、家を買ったり車を買ったりする必要はない。しかも両親と一緒に住んでいるため、あまり大きなプレッシャーはない。自分で金を稼いで自分で使い、使い終わったら、両親からもらうことだってできる (2005. 1. 28)」と余裕を見せる。彼女たちは高級な世界的ブランドに消費し、「月初めは金持ちで、月末は貧乏人になる」、世間ではそうした女性を「新貧族」と名づけた。彼女たちの年齢はほとんど 35 歳以下で、高収入を得ている。

2001 年 12 月 21 日、経済学者 F・T・McCarthy (マッカーシー) は雑誌『エコノミスト』(“The Economist”) で正式に「The Bridget Jones Economy (独身女性経済)」という概念を打ち出した。彼はこのように指摘している。「独身女性は広告業、出版業、娯楽業およびメディア業の製品とサービスの生産者、かつ消費者である。独身で、高額収入があるため、彼女たちは最も理想的な顧客である。ほかの階層と比べると、彼女たちはお金を使う衝動と感情がある。商品が流行に乗って、品質がよければ、彼女たちは大金を惜しげもなく使うのである」。

中国女性の教育レベルが高くなるにつれ、彼女たちの経済的地位も高くなりつつある。急速な経済発展、商品流通の自由化、独立した経済能力、それに一部の中国人がもともと虚栄心が強いことは、「独身女性経済」を作り上げた。

多くの中国都市の女性はなぜそれほど平然と「新貧族」になり、「明日のお金を使って、今日の事をする」ということを、自身の消費信念とすることができるのか。このことは中国における男女の恋愛、および結婚経費の比率の相違と極めて大きな関係があると考えられる。一部の男子大学生は恋愛をするとき、年間 20,000 元を使い、資金源は両親から、あるいはバイト収入からである。中には、自分の奨学金で恋愛に必要な資金を出す人もいる (2005. 10. 26)。往々にして、女性はデートする場所に行くだけでよく、デートでの支出を心配することはない。結婚費用の年々の高騰は、男性を悩ませている。

2004 年の『中国婦女報』の統計によると、『自家用車、家屋、家屋の内装』の費用以外、上海市で結婚式を行うとき、大体 80,000-150,000 元を費やさなければならない。その分配はそれぞれ以下の通りである。ウェディングドレス 5,000-10,000 元、友達を招待する宴席 50,000 元、結婚指輪およびジュエリー 10,000-20,000 元、結婚式における司会者への謝礼 5,000-6,000 元などである。また、セットを用いたウェディング撮影、ハネムーンなどを含めると、72%以上の人の結婚式費用は予算を超える。結婚式に呼ばれた人も、以前

は『50 元, 80 元は高価な贈り物 (50 元, 80 元算大札)』であったが, いまは『200 元では難しく, 500 元はちょうど恥をかかない程度で, 1,000 元ではじめて情を表すことができる (200 元難出手, 500 元剛遮丑, 満千元才顯情意厚)』(2004. 4. 8)。成都市の平均的な結婚費用も 120,000 元まで達した (2005. 9. 13)。天津市統計局都市調査チームは, 2004 年に住民の婚姻費用について調査を行った。結果としては, 「男性側は平均で 164,200 元を費やすのに対し, 女性側が拠出する費用は 41,200 元 (2004. 12. 23)」で, 男女の婚姻費用の差は 4 倍近くとなっている。中国の女性は結婚するとき, 費用を多く受け持つ必要がない。そのため, 彼女たちは結婚する前に, お金を思う存分に使えるのである。

中国の都市部に在住する中産階級は約 8,000 万人いる。そのうち, 収入の問題が理由で結婚していない中国の成年男性はおよそ 2,000-3,000 万人いる¹⁵⁾。男女両方とも独身者が大勢いるが, その中身は全然違う。婚姻の経済的な側面と関連しているのは, 「低収入のため結婚していない男性」である。「独身女性の経済」と関連しているのは, 「高収入で, のんびりして結婚しない女性」である。そのため, 結婚する前に男性と女性は完全に異なる状況に直面している。女性は「理想の男性に出会わなければ, 決して嫁には行かない」。一方, 男性は「お金がなければ, 嫁をもらうことを考えられない」のである。

一方, 中国の都市部にいる既婚者のライフスタイルにも驚天動地の変化が起きた。次に, 既婚者のライフスタイルを観察してみる。

2) 夫婦の間の「相互尊重」

① 「AA 家庭」の流行

周知のように, 1990 年代まで, 中国人は公共の場で「AA 制¹⁶⁾」を行う習慣があまりなかった。言うまでもなく, 当時「AA 制」を実施する夫婦もほとんどいなかった。1990 年代以降, 「AA 制」は多くの中国人に受け入れられて, 人々は我先にと争って他人の勘定を払わなくなり, 公平に自分の分を払うようになった。その後, 「AA 制」は中国都市部の一

¹⁵⁾ 騰訊網 <http://fashion.qq.com/a/20040910/000011.htm> 2008 年 2 月 10 日最終参照。

2005 年初, 中国の国家統計局は, 「年収 6-50 万元は中国都市部にいる中等家庭の収入基準である」と公布した。これは中国政府が「中産階級」について初めて既定した年収である。中産階級の職業は主に管理職, 技術専門員, 政党の公務員, 企業の技術員, マネージャー, 私営企業のトップである。それに, 大卒或いはそれ以上の学歴を持つ。

¹⁶⁾ 「AA」は「Algebraic Average」の略で, 割り勘という意味である。「AA」のもう一つの解釈としては, 英語の「Acting Appointment」の略である。16-17 世紀のときに, オランダとベニスに海上商品貿易と早期資源享受主義の発祥地であった。当時, イタリアとオランダを行き来する商人はレストランで情報を交換し, 別れるときには各自の費用を払う。商人の流動性は強く, 相手の分をおごると, もしかしたらその相手と二度と会わない可能性があるため, 人々は自分の消費した費用を自分で払うのが一番と考えた。

部のホワイトカラーの家庭に導入され、夫婦の間まで実行され始めた。メディアはこのような家庭を「AA 家庭」と名づけた。

「AA 家庭」は最初に広東省沿海地区で流行し、その後上海市、北京市、天津市、ハルビン市およびその他の都市へと徐々に広まった。2004 年に、北京市、上海市と広州市で行われた調査によると、平均で 21.1%の青年が「夫婦の支出は割り勘にすべき」ということに賛成しており、中でも上海市の比率は 26.9%に達した（2004. 6. 10）。2005 年、天津市婦人連合会は天津市で生活する 200 組あまりの中青年夫婦の経済生活に対してアンケートを行った。「夫婦の経済支出は割り勘を採用しているか」という問題に対して、68.7%の夫婦は「お金は一緒にしてある」と答え、「普通はすべて割り勘にしている」と答えた夫婦は 16.4%を占めている。注意しなければならないのは、表では、「夫婦双方のお金は一緒にしてある」という回答の比率が高いが、しかし訪問される側のうち 78.9%の人は「へそくりがある」ことを承認しており、その男女比率はほぼ同じである。また、「夫婦間で割り勘を実施することによって、婚姻の安定を更に有効的に維持することができ、それに婚姻の『7 年目の浮気』を克服することもできる（2005. 8. 20）」と認識する人もいる。

とは言うものの、多くの「AA 家庭」は子供の誕生によって、「割り勘」をやめなければならなくなると言う。「愛情の結晶（子供）」は、実際に「愛情のきずな」という作用を発揮しているのではないだろうか。しかし、1970 年代に、「ディンクス（*DINKS = Double Income No Kids*）族」は都市部ですでに現れ（1991. 2. 15, 1996. 2. 17）、近年ではこの数が増え続けている。

②楽しい「ディンクス族」

北京市計画出産指導センターによると、1984 年から 1994 年までの 10 年間のうちに、北京市では結婚して 5 年以上子供を生まない 6 万人近くの「ディンクス族」がいた。上海市では、1979 年からすでに 20 万組の夫婦が不妊を選んだ。1994 年には、中国の各大都市の「ディンクス族」はすでに 100 万組まで上がった（1994. 12. 18）。1999 年に、北京市では「ディンクス族」が出産適齢夫婦の 10%を占めた（1999. 8. 30）。2000 年第二期中国婦女社会地位調査データでは、「子供がいない女性は完全なる女性ではない」という質問に対して、「とても賛成できない」、「あまり賛成できない」、「比較的賛成する」、「非常に賛成する」、「よくわからない」と選んだ比率はそれぞれ 33.0%、35.5%、16.3%、7.9%、7.3%（陳方, 2003, p. 119）、となっている。いわば、七割の被調査者は女性が子供を産まないことを受け止めることができる。近年、「ディンクス族」の勢いはますます増える一方である。2005 年に行われた「現実と夢——ヤフー中国のビジネス生活逸品ランキング、および中産階級の生活における夢に関する調査」によると、中国の都市部にいる既婚の高収入のホワイトカラーの中で、「5 年経っても子供を作らないで、夫婦二人の世界を続ける」ことを選ぶ比率は 22%である（2005. 4. 1）。都市部の「ディンクス」夫婦たちは子供に自分の仕事が

影響されることを恐れている。

短期間で凄まじい経済発展をした中国経済は人々に競争心をもたらした。特に、改革開放で「一部の人が先に豊かになれ」という政策を実施して以来、30年間になろうとしている今日、格差現象がますます深刻になる一方である。多くの中国人はひたすら「物質的な豊かさ」を求め、「精神的な豊かさ」、一家団欒の楽しみを軽視した。言うまでもなく、鄧小平の「先富論」の初志は進歩的で且つ賢明であったが、しかし一部の官僚は自身の権力を利用して、私腹を食欲に肥やしている。少なくとも今日まで、中国社会では、至るところに不公平が存在している。近年、格差問題はいつそう目立ち、「調和がとれた社会」は一つの有名無実なスローガンに過ぎない。人々が関心を持っているのは、自身が時代の滑走路から締め出されないということである。このような社会環境の中で、心理状態が偏り、人々には他人を考慮する時間と余裕がなく、子供を産み育てるなどなおさらである。そのため、一部の夫婦は「子供のために生きる」というライフスタイルを選ばず、「自分のために生きる」という生き方を選んだ。

次に、中国の都市部における女性の婚姻意識の変化および新しいライフスタイルの享受は、家庭と社会にどんな影響を与えたのかを分析する。

Ⅲ 都市部女性の家庭観念の変化が家庭と社会にもたらす影響

近年、中国では、「子供と孫が老人と別々で食事し、別々に住み、それに加えて、子供が親族訪問をする期間が多くても一週間で、老夫婦二人、あるいは一人で長期的に住んでいる」というような家庭を「空の巣家庭」と名づけた。1983年に、中国都市部の既婚者が両親と同居する割合は52%で、1993年には42%まで下がり（潘允康等、1997、p. 70）、10年間のうちに10%低下したということになる。

2000年第二期中国婦女社会地位調査データ結果によると、18-34歳、35-49歳、50-68歳の女性は結婚後に夫婦だけで生活したいという比率はそれぞれ31.0%、28.1%、24.9%である（陳方、2003、p. 112）。このように、女性の年齢が低ければ低いほど、結婚した後に夫婦だけで生活したい傾向がある。

前章で述べたように、近年、多くの都市部の女性は結婚していなくても、すでに自分名義の家屋を持っている。そのため、彼女たちは実家から自分の「家」に引っ越す。一部の女性は確かに仕事が多忙であるため、頻繁に帰省し両親に会うことができない。しかし、一部の女性は両親に絶え間なく結婚を催促されるため、実家にあまり顔を出したがいなくなるのである。これらは近年中国全土で現れ、特に都市部で際立ち、しかもますます増加している「空の巣現象」を形成する一つの要因である。

2000年11月に、中国における5回目の国勢調査が行われた。調査結果によると、65歳以上の老人がいる家庭が全国で20.09%を占め、そのうち「空の巣家庭」は22.83%を占め

る。全国の3.4億戸の家庭の中で、少なくとも2,340万人の65歳以上の「空の巣老人」が福祉による援助を必要としている。

近年、都市部の「空の巣」問題はますます深刻となっている。2004年のデータによると、北京市では、170万戸近くの老人家庭のうち、34%が「空の巣家庭」である。特に注意しなければならないのは、一人で住んでいる老人の比率が1999年の3.8%から2004年の11%まで上昇し、約3倍へと増加したことである(2006.6.26)。2004年において、上海市では「空の巣老人」の数は一昨年より約10,000人増え、そのうち、一人で住んでいる老人は170,131人に達し、一昨年と比べて4,504人増えた。2005年3月の時点で、上海市には70.96万人の「空の巣老人」がいる。そのうち、一人で住んでいる「空の巣老人」は16.56万人に達している(2005.9.3)。目下、中国都市部の「空の巣家庭」はすでに30%を上回った。孤独感が原因で、老人は様々な心身の疾病にかかるようになった。「空の巣老人」は四六時中ペットと一緒にいて、中にはすでに「ペット依存症」になっている老人も少なくないのである(2004.5.10)。

中国の現代化建設の展開に伴って、人々の仕事の変動は日に日に頻繁になり、一部の農村部の人々は都市部に移って、働き、生活するようになった。それに近年、人々は自由に住宅を買い、賃貸することができるようになったため、ますます多くの未婚者あるいは既婚者が両親から離れ、自分の新居に移り住むようになった。当然のことながら、仕事のために住居を購入し、会社に通う人も大勢いる。また、海外へ留学、仕事などをする人も大勢いる。それに、感情的な苦境から逃れるために出国した女性もいる。これらの海外にいる人は両親の面倒を見ることが容易にできなくなる。と言うより、親に頻繁に会うことさえできない。さまざまな自発的あるいは他発的な人口移動と移転は、中国の家庭構造を「大家族」から「小家族」へと急速に転換させた。時代の発展につれ、中国都市部の女性の家庭観念は大きく変化した。彼女たちは、「老人と同居し、一緒に食事を取ることが親孝行をする唯一の方法である(1999.3.16)」とは考えなくなった。以上すべての要素が中国の「空の巣」現象を日々深刻にさせた。中国の「空の巣」問題はすでに今日の中国社会における一刻の猶予も許されない課題となったのである。

おわりに

以上、中国共産党の機関紙と称された『中国婦女報』で報じられた社会現象を時系列で追いながら、近年中国の都市部に生活する「80後」世代と「余女」世代に見られる婚姻意識における変化およびライフスタイルの特徴を整理し、分析した。

「80後」世代の全体的な婚姻上の特徴とは、「恋愛は早い、結婚は急がない、また子供を生み育てることも急がない」であるが、「電撃結婚」、「大卒結婚」、「電撃離婚」および「電撃同棲」などの現象も熟考しなければならない。

また、中国都市部にいるいわゆる「三回目の独身危機」の当事者である女性たちの生活ぶりの優劣はひとまず論じないが、しかし彼女たちの消費の勢いは中国経済の発展に大きく貢献していることは事実である。

改革開放による急速な経済発展において、多くの中国人は独立意欲が強くなり、厳しい競争社会の中で「心の余裕」を失い、自己中心的で、私利私欲に走りがちになった。「AA家庭」、「ディンクス家庭」および「空の巣家庭」の急増現象はその問題の表れであり、転換期の中国社会の中に現れた一種の「後遺症」と言えよう。

今日の中国の都市部に現れた以上のようなさまざまな現象は、単に個人的あるいは個々の家族の問題にとどまらず、社会全体の問題であり、そしてミクロな問題にとどまらず、またマクロな問題でもある。ゆえに時代変化とともに進展する社会政策を考えていく必要がある。

(ぐ へい・愛知大学国際問題研究所客員研究員)

参考文献

- 【『中国婦女報』の記事】(日付順)
1985. 1. 9 楊鳳池, 林国慶「女子独身問題初探」。
1985. 3. 20 馮越「她們分到了住房」。
1985. 7. 17 南萱「給未婚大女優先安排住房」。
1991. 2. 15 李銀和「自願不生育：一種新的文化現象」。
1994. 12. 18 元成「『丁克』兩人世界的逍遙」。
1995. 8. 29 新華社發「新中国婦女『第一』(迎接第四次世界婦女大會資料)」。
1996. 2. 17 「『丁克』憂歡」。
1999. 3. 16 陳方「世紀調查 改革開放前後中国女性价値變化的調查與思考」。
1999. 8. 30 「快樂的『丁克』族」。
2000. 5. 8 東民, 文強「新女性・新消費・新生活——新時代女性五大消費熱點」。
2003. 1. 18 吳玉蓉「單身女子：快樂比錢重要」。
2003. 9. 24 劉虹「出國留學：18歲以下過半」。
2003. 10. 24 「洪天慧在全國婦聯宣傳工作座談會上的講話」。
2004. 4. 8 「上海婚禮費用不斷昇級 部分新人舉債消費」。
2004. 4. 16 趙王月「白領『負女』痛并快樂着」
2004. 5. 10 彭芸「『空巢』老人與寵物相伴相隨」。
2004. 6. 10 羅雪揮「『AA家庭』在中國悄然流行」
2004. 12. 23 「獨身子女結婚開銷近20萬」。
2005. 1. 28 張曉娟「『新貧族』：心無雜念享受現在」。
2005. 3. 9 吳敏「九成大学生戀愛不考慮婚姻」。
2005. 4. 1 賈中山「都市『白領』為錢所累」。
2005. 7. 27 「職場女性緣何風行『隱婚』」。
2005. 8. 16 「女性年逾38多被婚介所婉拒」。
2005. 8. 20 陳軍「讓『AA婚姻』快樂走過『七年之痒』」。

2005. 9. 3 「過自己的生活 上海独居老人超過三成」。
2005. 9. 13 李西平, 侯建剛「成都新人結婚平均花費 12 万」。
2005. 10. 26 羅社宏, 李林娜「恋爱消費 一年兩万」。
2006. 6. 26 王艷坤「空巢家庭導致空巢心理」。
2006. 7. 1 田嵐「从婚姻法立法变化觀察离婚新趨勢」。
2006. 9. 2 饒沛, 荆浩「大齡未婚青年男女 3 : 7」。
2007. 1. 26 鐘時「『剩女時代』愛情离婚姻有多遠?」。
2007. 3. 30 戴勁, 石凱峰「『畢婚族』難脱婚姻『襁褓』」。
2007. 6. 27 丁秀偉「『80 後』婚姻為何如此脆弱」。

【著書・論文】

- 陳方 (2003), 『失落與追尋——世紀之交中国女性價值觀的变化』中国社会科学出版。
- 潘允康等 (1997), 「住房與中国城市的家庭結構」『社会学研究』第 6 期。
- マッカーシー (2002. 6. 3), 「自由生活的代价——都市未婚女性掀起『購房熱』」『新聞週刊』。
- 盧淑華 (1997), 「婚姻觀的統計分析與變遷研究」『社会学研究』第 2 期。